

輩の前章に於て見たるが如く、其の名稱の由て來る所俄かに判定し易からず、然るに Rashid-eddin によれば、Toquz Uirur なる者は「Karakorum 山の邊に九流及び十流の河水の灌漑せる地方ありて、昔 Uigur 人茲に住みしが、九河の地方に據りしものを Tokuz Uigur といひ、十河の地方に據りしものを On Uigur (十ウイグールの義) といへり」と記され、其の地を流るゝ河流の數より名を得たるものとせらる、此の如きは誠に自然の解釋にして、實に北方民族の間にはその地の河流より名を得たるもの多し、然るに唐に九姓回鶻といふものは決してかゝる理由によりて稱へられるたる名稱とは思はれず、殊に此の Tokuz Uigur の外にも On Uigur なるものありとせられ、なほ又「其の他にも百二十部の Uigur 部ありき」と記さるゝに、^{補⑦}唐にてはたゞその中の Tokuz Uigur のみを特に九姓回鶻として傳へたりとは信ず可らず、余輩は傳説として記せる Rashid-eddin の Tokuz Uigur なるものが、唐に所謂九姓回鶻に相當するものと信すべき確かなる理由を見出し得ざれば、たゞ名稱の同義なるよりして、此等の兩者を同一視せんとする諸家の説には賛する能はず、但し此等の諸氏は Toquz Uigur は即ち九姓回鶻なりと認むるものなるを以て、その Toquz Oruz と Toquz Uirur との關係として記せる所は、即ち Toquz Oruz と九姓回鶻との關係を論述したるものとして觀察するを得ること勿論なり。Rashid-eddin の書に於ては Bretschneider, *Medieval Researches from Eastern Asiatic Sources*, vol. I, p. 269-260 による。

⑧ Marquart, *Die Chronologie der alttürkischen Inschriften*, S. 23

⑨ 通報第十五卷(一九一四年)所載 *La version ouigoure de l'histoire des princes Kalyānankara et Pāpamkara*, 1. LXVII

⑩ 同上第二百五十七頁註釋參照

⑪ 東洋學報第五卷二一四頁

⑫ 「紀元第八世紀には Kangar は尙 Yaxartes 河の下流及び Aral 海に沿ひて住みしが、其の後 Ätil (Volga) 河と Jaik (Ural) 河との間、Magyar 人及び Oruz 人の隣に住處を定むるに至れり、而して八九四年頃に、彼等は Chazar 人と共謀せる Oruz 人の爲に討たれ、之が爲に從來 Magyar 人の領せし Volga 河と Kuzu 河との間の地方に新住地を獲得せ